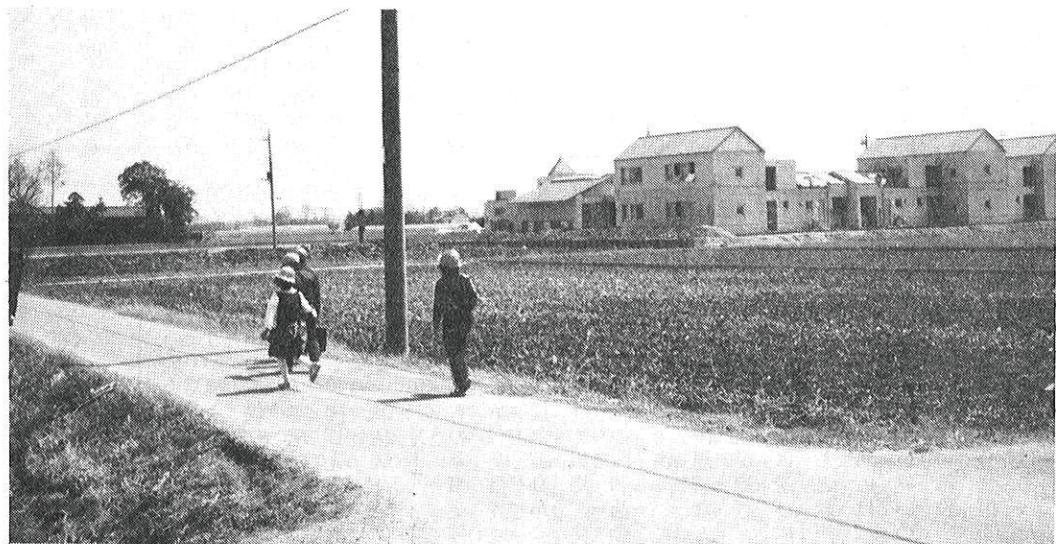


# 光の子

発行／社会福祉法人光の子どもの家  
 編集／光の子 編集委員会  
 〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277  
 TEL／0480-72-3883  
 振替 東京3-128022  
 印刷 (株)ドモン企画



## 長い道のり

一九八六年四月  
 登校開始

## 麗しい足 (ローマ一〇・一五)

理事長 福島 勲

あの交通不便な時代に、小アジ  
 ャからアカヤの一帯を、三度にわ  
 たって大伝道旅行をしたパウロは  
 まさに足の人であった。

足こそ実行を示し、実践のうる  
 わしさを語る。聖書はここで足が  
 うるわしいという特異な表現をす  
 るが、足を用いて伝道につくす人  
 こそ麗わしいのである。

老人は足からくるといわれる。  
 その予防に足の鍛練を志す。だが  
 考えるまでもなく、頭脳にも内臓  
 にも老化がきて足にも及ぶ。足だ  
 けが老化するのではない。

しかし足が弱まるところで老化は  
 頗著である。

実践行動を失うと人は老化した  
 といえよう。だに個人だけでは  
 ない。教会でも、国家でも、もちろ  
 ん施設でもある。

下手な役者を馬の足という。  
 だが馬の足もいないと芝居になら  
 ない。とはいっても馬の足では卯建  
 があがらない。何ごとによらず、絶え  
 ず努力を続けなければならぬ。

われわれも卯建をあげるために  
 加速しなければならないが、時た  
 ま起ってくるオーバーヒートを  
 何で冷やすのか。

心の足の痛みは単なる物質では

ればならない。  
 いつだつたか大菩薩峠のぼつ  
 たことがある。山小屋のふくちゃ  
 ん荘に一泊したが、このときここ  
 の主人から鹿の生態の一部を聞か  
 された。

近くに鹿がいて、しばしば谷川  
 で足を冷やすということであつた。  
 あの優美な細い足がオーバーヒ  
 ートして蹄が痛む。それを冷い水  
 でひやすのである。

そのときふと詩篇四二篇を思い  
 出した。

「神よ、しがが谷川を慕いあえ  
 ぐよう」とある。

飲む水を求めてあえぐのかと思つ  
 ていた。もちろん飲むことでもあ  
 ろうが、獵師や他の動物に追いかけ  
 られて加速して痛めた蹄を冷やす  
 ためでもある。

心の足の痛みは単なる物質では

下手な役者を馬の足といふ。  
 だが馬の足もいないと芝居になら  
 ない。とはいっても馬の足では卯建  
 があがらない。何ごとによらず、絶え  
 ず努力を続けなければならぬ。

われわれも卯建をあげるために  
 加速しなければならないが、時た  
 ま起てくるオーバーヒートを  
 何で冷やすのか。

心の足の痛みは単なる物質では

県では、十年人事ということと伝統校から伝統校への転勤はできないということ等の人事異動の方針を、数年前から打ち出しているが、新設校の増加した状況の中で教員配置の平等化と教員の活性化を重視、時代に対応しようとしたもので、一応の成果は見られる。ただし、以前のような、その学校に骨を埋めようとする教師の本懐

に当たりたいと思う教員のエネル  
ギーを、増幅するような施策がと  
られることを念願するものである。  
校長さんが、三年かそこらで、  
転任になるが、これまた、平等と  
いう、民主主義の名を借りた安易  
な施策と言える。・不動・とは、  
眞実に立脚して、眞実を求めて全  
力を打ち込む気概をさして言うが、  
三、四年で動かされるようでは、

生に胸像（石膏）を作つてもらひ、機会に恵まれた。彫塑を趣味とされている先生のモデルとして、たまたまその対象になつたといううとで、格別の意味があるわけではないが、理想化されて作品になつたそれを見るにつけ、新たな感慨を覚える。

「転勤近く手も足もなし」と記した。字で、じた。私はそのわきに、小え

エッセイ  
転勤雑記 落合水尾(「浮野」主宰)

その真価が發揮できず、不満を残すだけで、同情さえ覚える。  
教育は発酵である。地域に立脚する。十五年間勤めて、なおもいつまで勤めていたいすばらしい伝統を誇る母校ではあるが、敢えて

仲間作りを目指すのである。今年度よりその根を堅固に張らせたい。

誰によつても代替されることのない、かけがえのない存在として、その尊厳を保障し、慈しみ育心につつ目指すのである(あわせて、子どもの自主性を育みつつ、自己表現がスムーズに為されるような

育つことを願つて関わり続け、一  
回限りの子どもも時代を充分に生き、  
安定と子どもの社会化」とを、所  
属感と自己尊敬の欲求充足を図り

という人間の尊厳を奪い取られたこの子どもたちと共に生き、共に意義とされる「パーソナリティの

まず、年間聖句「愛をもつて互いに仕えなさい。」（ガラテヤ書五・十三）と立ち合ない。家庭養育親子関係を基軸とする家族に代り得る場としての生活がつくりあげられなければならぬ。

らは、約九十頁に及ぶ計画書として文章化された。形成する△世帯▽としての単位集団（担当保母一名）は、安定した

云ふ。一月三月にかけて、一ヵ月六年度事業計画の策定のため、何回となく協議を重ねてきた。それ童にとって、各家十名の集団規模と、各階五名以内の子どもも集団が

価は、本年度以降の実践活動で問  
われるといえよう。  
年間行事計画、などである。  
当園では施設養護の根幹を、家  
庭内養護とするべくする。要養護兒

これからが本番であり、社会福祉活動としての本園の施設養護の真実習性・ボランティアの受入れ十、個人別年間養護計画 十一、

経勢十八名（定員三十名）が三  
軒の家に分かれ生活している。そ  
の意味では、地域社会との交流は  
運営八、地域とのかかわり九  
旅館係へのとりくみ五 アフタ  
ーケア一 六、食生活作り七、

加註：全閣公私  
他に園内保育の幼児七名を迎へ、  
保障、学校とのかかわり)四、家  
庭内保育の八名(三歳二名)、三  
歳一一名)、二歳二名)、一歳二名)

施設長今関公准 活作り（原田家・佐藤家・仙道家）

宗教的情操を豊かに養う。二、生

め、次の諸項目を検討した。一、



夏の盛りにここへ来て、秋を迎える頃までは、顔を近付けると嫌がり、抱っこをしても上体が突っ張り、甘えることが全くできない人に対して何も求めることをしない Aちゃんでした。

それが、北風と太陽のお話ではありませんが、寒くなるにつれて「抱っこ」を求める回数が増え、顔を近付けると、自分から近付けてくるようになりました。

ある冬の日、Aちゃんを抱っこして散歩していると、

「抱っこするときの手は、こう？」と、以前教えられた通りに、私の肩にぎこちなくまわした小さな手。遠慮しがちに、けれど、しっかりとつかまっていました。そのとき

うとしませんでした。

あの日も叱られて、一人で部屋で泣いていました。扉のすぐ向こう側に私がいるとわかつていてもチラッチラッとこちらを見ながら私が慰めに行くのを待っているよう、わんわんと声をあげて泣き続けていました。——どうして、素直に謝ることができないのだろう。どうして、もっと真っすぐな気持ちで、私を求めてはくれないのだろう——。私は、日頃の自分の取り組みを棚にあげて、尚も泣き続けているAちゃんに「どうして」「どうして」と投げかけていました。自分がAちゃんに求められるべき存在であるか否かも顧みず、ただただ求めて欲しいという願いだけでした。

それからは、叱る度、叱られる度、意地つ張り同志の頑張り合いです。どちらが先に折れるか……

そして、ある小春日、叱られていいじけたAちゃんは、外へ出てしまいました。私は窓からその後ろ姿を見つめながら、「どうして、通じないのだろう。」と自分に対しても、Aちゃんに対しても言い難い憤りを感じていました。その私にAちゃんが気付き、うつ向き加減にそろそろとこちらへ歩き出しました。花壇の前の枕木を通り、クローバーのじゅうたんを通り、とうとう窓の下まで。

「ごめんなさい。」

成長していくでしょう。  
あの日、あのとき、あの後ろ姿  
で、Aちゃんは何を考え、何を決  
心したのでしょうか。きっと二歳児の  
らしからぬ決心であつたことと想  
います。あの日のAちゃんの後ろ姿  
姿を忘れず、その決心に応えるべ  
く努力していかなければ、と思いま  
す。そして、いつか彼女の持つ  
世界を感じ、共にできる部分を持  
てたらと願います。いつ爆発して  
もおかしくない爆弾を心ならずも  
持たされてしまったAちゃん。そ  
の火薬の量が少しずつでも減つ  
いきますように。不足だらけの私  
で、不満だらけでしそうが、今年  
度もよろしくお願ひしますね。

光の子らしく 1

岩崎まり子

Aちゃんにとつては、とても難しいことだったと思います。最も安心して寄りかかるれる母親から虐待され、養育そのものを拒否されるという、生まれて以来続いている状態は、私には、想像することができません。ここに来るまで人に求めないことを学習してきて、それとは一八〇度違うことを求められていたのですから……。

入所当初、窓から外の景色を眺めては、大きく肩でため息をついていたAちゃん。そんな二歳の子どもたちの後ろ姿を見て、「私達の仕事とは何なのだろう。」「私に一休ができるのだろう」と、今思えば、何と高慢なことをを考えていたのでしょうか。私などは何もできなかつたけれど、Aちゃんは着実に成長し、また、これからも

ます。まだ幼稚園に行っているM姉ちゃんに漢字を教える人はいません。保母が仕事をしたり、手紙を書いている隣で、M姉ちゃんは一人で練習するのです。「まだ早いんじゃない」「遊んできたら」心中でそう言いながら、M姉ちゃんのファイトに押され、M姉ちゃんがなるべく長く座つていられると、私も下を向いてペンを動かします——はやく小学生にしてあげたいなあ。そのM姉ちゃんも、四月八日に小学生になりました。ランドセルに負けることもなくしつかり背負い、通学班のお兄さん、お姉さんと一緒に毎日四十分くらいかけて学校に通っています。

した。三人を担当するにあたつて、知らないことが意外に多く、持ち物を点検し、整理することからはじめました。私の予想を裏切り、子どもたちは喜び、M姉ちゃんと一緒に、他の子の持ち物の整理もしました。年令もこの中では一番高く、なんでもわかり、ごまかしえぬM姉ちゃんが、違和感をなるべく感じないように、様子を見ながら、一緒にいることができる時間少しづつ増やしていくきました。その間にも、M姉ちゃんがN君を本当の弟のようにかわいがり、面倒を見るなど、四人のグループができ上がっていきました。

ある日の夕方、M姉ちゃんとT君、Mちゃんが部屋にとじこもり

四人とも竹花保母が担当できたらいいのに」と思いました。それでも、入園・入学の日は迫ってきてあります。入園・入学に関する事を私が受けもっているということで、四月から担当が替わるということに気づき、M姉ちゃんはM姉ちゃんなりに覚悟を決めたのだと思います。

三月二十日にEちゃんが原田家に来てから四日後の、二十四日夕方、私が部屋で洗濯物をたたんでいると、走って来て「秋元さん」と言うのです。秋元さんがお休みの時は、信惠とか祐子さんと寝てもいいんだよ」と私が宿直で泊まっていたの



ワークブックと筆箱を持ってM姉ちゃんがやつて来ます。「お勉強しよう。お勉強しなきゃ、学校に行けないんだから。がんばろう。」幼稚園の年長さんとは思えないような言葉に顔を上げワークブックを見ると、『かんじ』と書いていた。二ヵ月前、原田家の新しい友だちとしてN君がきました。子どもたちに担当が替わったことを言うと、竹花保母が四人の担当として関わる、他の職員の協力を得ながら私が少しづつ、入所第一号の三人と関わる部分を多くしていくま

模やドアをしめ、N君を仲間はずれにしてあそんでいるのを見ました。その時は、普段仲がいいので気にしなかったのですが、その後も何度かそういうことがあつたらしく、M姉ちゃんが「ここは、Mちゃん（M姉ちゃん）とMちゃん」とT君のお部屋。N君は信恵さんとお二階だよ」と言っていたといふことを聞きました。「誰も話していないので、何故？」「このまま夕食会で、誰よりもはつきり、新しさの年のはじまつたお祝いのかもしれません。その夜、はじめて一階と二階で分かれて寝ました。大人がはつきり言うことができず子どもに行動をおこさせてしまったという情けないことになつてしましましたが、三月いっぱいは花保母のところにいさせてあげたいと思っていたので、分かれるのがはやすぎたような気がします。

離婚、入院などが入所理由の最も多いものである。親が子どもにする虐待も少なくない。これは断じて子どもの問題ではない。早過ぎたか、軽卒だったか、一身上の重大な決意によったかはどうでも大人どうしが結んだ婚姻関係を解除するのに、両性の合意と確認があれば自由なのである。しかし、どう考へても両親の離別を子どもが望んだり、喜んだりはしないだろう。どんな状況であつたとしても「それでも一緒に暮して欲しい」と大人の忍耐と寛容、和解を願い祈つたに違いないのである。

あるから不利益をも共有すべきだとしても、子どもに強いられる不利益は偏りすぎている。このことの確認が養護施設の機能を始める地点なのである。

何よりも、子どもに偏りすぎた不利益によって圧し潰されているやわらかな人間性を回復させ、普通一般の子どもの位置を取り戻さなければならない。子どもが負わされている不利益の全てが誰か他者によつて肩がわりすることが可能なのではない。宿命的にその子どもが負い続けなければならぬものがはるかに多いのが常であり、私たちのできることはそんなに多

が出会う危機であり、決定的な課題の時でもある。「子どもがもつことのできる一番大きな恐怖は、自分が愛されないことですし、愛を拒否されるということは、子どもがひどく恐れる地獄」（エデンの東）なのである。

その子どもでなければ負うことのできない課題であるということは手をこまねいている怠慢は許さない。凍てつくような絶望的な状況と子どもを孤りで向い合わせてはならないのである。腰をかがめ、肩の位置を並べ、共にその困難に向き合うことで、どれ程子どもに決定的な勇気や希望をもたら

握するため、そして何を二と  
が必要としているかを見い出す  
ために、同じ位置に隣りつづける  
こと。竹花保母は「これが私たち  
の仕事のすべてだらう」と本紙二  
号に記している。

絶対絶命のピンチであっても、  
必ず解決の方法があることを、光  
の子どもの家の準備から成立、そ  
して成立から現在までの経過のな  
かで識られしつづけた。そしてそ  
のピンチから生還した者は、それ  
の存在さえ知らない者たちよりも  
はるかに豊かで大きい。そんな人  
間に育み、私たちも共に育つこと  
を決意してこの年度を歩き始めた

柔和な人々は：

菅原 哲男

くはないのである。

すか計り知れないのである。「環

入所以来、保母と一対一の関係で暮らして来たNちゃん。それも3月31日で終わりになりました。今度は4年生のM姉さん、一年生のY兄さんと3人のグループです。今までそれ程保母にペタペタ甘えわけでもなく、結構薄情な所もあった子なので3人グループになつても保母の後を追うこともないだろうとタカをくくっていました。ところが思いがけないNちゃんの情緒不安定……。そして毎日忙しくなってしまった保母。戸惑いと忙しさの中で毎日が慌ただしく過

さなMくんの入所以来、どんどん大人の目がNちゃんから離れて試練の日々が続きます。Nちゃんはその淋しさをストライキとわざわざ叱られるようなことをすること表現します。急にパンツを自分で脱ぎます。わざときたない食べ方をして叱られます。自分にだけ目を向けてほしい、自分だけを見てほしい、叱られている間はNちゃんに大人が全神経を向けてくれるから、そんなNちゃんの叫びが聞こ

Nちゃんの誕生日の次の日は私の誕生日でした。誕生日まで同じなんてやっぱり親子みたいだと他の職員からからかわれました。でも、楽しいことよりつらいこの方が多かったこの一年、私はNちゃんの笑顔にどれだけ助けられました。お父さんが買って下さったチョコレートケーキ。どんなケーキよりおいしかったことでしょ。うれしくてうれしくてなかなか眠れなかった日。そんな一日をプレゼントして下さったお父さん。本当にありがとうございました。

A black and white line drawing of a young boy with a large head and a wide, smiling mouth. He is wearing a baseball cap and holding a baseball bat. To his right, there is Japanese text.



心細さの中で 4

上棟  
圭子

えてくるようです。そして、こんなかわりしか出来ない自分の力のなさをひしひしと感じてしまいまます。

抱っこしているつもりが、いつの間にかNちゃんに抱っこされる自分が見えます。まるで自分の子のように感情的に叱ったり、自

**日誌抄**

二月十六日  
四月十五日

三日、江森理容店、整髪のご奉仕。四月一日、第四七回職員会議。新チヨコレートも。毎月のこととで、年度へ向けて抱負を語り合い、承認され執行を始めた事業計画

二月十七日、第四回職員会議。

これまで年度の反省を終えて、新年度計画案づくりに着手。個人別養護目標の検討開始。

二月二日、池沢病院大月事務長さん本を沢山ご寄贈下さる。感謝。

二月五日、流山市の佐久間さん、来訪し励まして下さる。ありがとう。

全国養護施設協議会、人権委員長の長谷川重夫氏、特に学童の入所制限と連絡協議会の権限と規模について調査される。

二月七日、第二回連絡協議会。多くの人々の注視と関心にもかかわらず、又も、PTA連合会長などの無理解な少数意見に県当局が乗る形で八・一合意の確認にとどまり、入所制限撤廃ならず。

連絡協議会の縮少撤廃は議題にすらならないまま。

三月一日、町内在住の栗原八洲子さん、管理栄養士として就任。

三月、大利根藤幼稚園の年度のしめくくりのお遊戯会。子どもたちのこ家族も遠くから来て下さいました。

り、楽しい一日でした。

入れ準備のために、原道小学校全教師が来訪され、施設見学の後熱心な情報と意見の交換。

十二日、佐藤家T君が担当の石毛保母と、妹のMちゃんの入所している富士見乳児院に、兄弟関係の回復を願って面会に行く。

十七日、三愛学園の学習会に今関、丹羽、池田が参加、刺激を受く。

二月二〇日、Eちゃん、四才女児入所。

二月二四日、第四六回職員会議。

二月二九日、三愛学園の学習会に今関、丹羽、池田が参加、刺激を受く。

二月二九日、第六回理事会。一九八六年事業計画案、予算案等を熱心に審議、承認。

三月一日、一九八五年度、さよならパーティを。激しく厳しいこの一年をふり返り、子どもたちひとりひとりの成長のあとが担当

保母によって紹介され、祝福し合う。守られ、導かれてここに

が世話をし、様子を把握して担当者を決めていく試みを開始。

歩きます。乞う、ご期待！（哲）

この年度をはじめる。

Y姉弟、小学四年生、一年生入所。仙道家上棟保母の担当。約一ヶ月後の養護目標を提案するまでの間、倉沢保母が副担当として協力するという試みを始めます。

所。仙道家上棟保母の担当。約一ヶ月後の養護目標を提案するまでの間、倉沢保母が副担当として協力するという試みを始めます。

**反射光**

○凍土のなかで厳しい冬を耐えたクローバーが

一層鮮やかな春の園庭を演出します。朝七時前、黄の帽子とランドセル五つが駆け出して行きます。

セル五つが駆け出して行きます。○今回は新年道はなお続きます。

所。仙道家上棟保母の担当。約一ヶ月後の養護目標を提案するまでの間、倉沢保母が副担当として協力するという試みを始めます。

所。仙道家上棟保母の担当。約一ヶ月後の養護目標を提案するまでの間、倉沢保母が副担当として協力するという試みを始めます。